



一介の大学教員のつぶやき

私は、この手の文章を書くのが非常に苦手である。まだ、若輩者ということもあるが、何を書けばよいか、それを考えるだけでもかなりの時間を使ってしまう。ただ、今は国際学会への移動中なので時間はたっぷりある。これを機に私が最近感じたことを中心に書くことにする。

最近、博士後期課程へ進学する学生数が減少している。私の所属大学や学部も例外ではない。一般的にその大きな理由は、やはり経済的な問題である。学内外からの様々なサポート体制はあるものの、採択率や支給額の面でまだ十分とは言えない。また、博士号取得後の進路への不安も大きな理由であろう。大学でもポスト獲得は年々厳しさを増している。加えて、大学教員定員削減の荒波が押し寄せ、若手にとってはますます厳しい状況になっている。また、海外留学中のポストが日本でのポジションをなかなか獲得できないという話も耳にする。

しかし、博士課程に進学しない学生によくよく話を聞いてみるとどうやら経済面等だけが問題ではなさそうだ。根本的に研究職、特に大学での研究に対する魅力がそれほど高くないようだ。決して研究に対する興味がないわけではない。しかし、どうしてもいい書類や報告書作成、無駄に長い会議など日々雑務に追われる我々大学教員の姿を見て、大学での研究職への魅力が半減してしまっているようである。学生たちの目には我々のような大学教授はどのように映っているのだろうか。研究を心底楽しんでいるように映っているだろうか？ 時折心配になる。数年前から、「疲れた～」とか「面倒くさ～」ということができるだけ言わないようにと誓ったが、つつい出てしまう。本当に困ったものだ。ただ、そういう中でも興味深い研究データや独立研究テーマ間に予期せぬ接点があつた時などには、やはり興奮するもので、疲れも一気に吹っ飛び、夜も

なかなか寝付けなくなる。私のラボでも定期的の実験報告ミーティングをするが、それ以外でも学生が面白いデータが出た時はすぐに私のところへ見せに来てくれる。自分自身で実験する機会は最近ほとんどなくなったが、その面白いデータに出会う感動の瞬間、摩訶不思議な結果を妄想半分に学生といろいろディスカッションする時は本当に楽しい。大学研究者の醍醐味である。つい最近、久々に自分自身の手を動かして学生の実験に協力した。実験自体は簡単なものだったが、それでもやはり楽しい。今でも実験をしたいと心底思っている。研究の勘のようなものも維持できる。また、久々に実験してみようかなあ。学生の邪魔にならない程度に。

いつの時代にも厳しい状況はあるが、博士後期課程へ進学には、結局のところ研究への大きな魅力を持っているかに尽きる。最近、共同研究の打ち合わせで海外の研究所へ訪問した。その研究所では、研究に専念できる環境にあり、多くの若手研究者が自身の研究に楽しみをもって取り組んでいる。その生き生きとした話口調からもよくわかる。羨ましい。日本はどうであろうか。大学等でPIになった若手教授には何とか委員などの雑用がまず確実に回ってくる。一番、研究をバリバリやる、あるいは立ち上げた研究室のスタートを切る大切なその時期に、研究以外の雑用の嵐は本当に大変だ（まあ、そのくらいこなせずにどうするという意見もあるだろう）。また、一体どこで活用されるのだろうかとか疑問符をつけたくなるような書類が最近非常に多い。それに使う時間が本当に無駄である。日本の研究者の研究エフォート率を高め、研究を生き生きと心底楽しめる魅力ある職種にする思い切った改革をしてほしい。そういう姿を見せることが、我が国の研究力だけでなく、博士後期課程への進学率の向上に大きく貢献すると思う。

つい最近、高校生になる私の娘が大学に入ったら研究してみたいと言い始めている。まあ、今は漠然と考えているだけだと思うが、娘が大学で研究する頃には教員と学生共々少しでも研究に専念できる良い環境になっていることを願いたい。最後に、示唆に富んだ他稿と比べ、大変稚拙な本稿をお許しいただきたい。

(つきみ)